

中期プラトン主義の時間論

——アッティコスにおけるプラトン解釈の構造——

金澤 修

はじめに

本シンポジウムでの私の課題は、中期プラトン主義者¹による時間論をプラトン解釈の伝統から明らかにすることである〔本稿は「時間」を中心に扱うが、「永遠」についても随時触れる〕。以下では、アッティコス²が解釈した限りの「プラトンの時間論」を概観する。しかしその前に、多様な方向性をもつ「中期プラトン主義者」から、何故この人物が「プラトンから新プラトン主義へ」という本シンポジウムの副題のもとに取り上げられたのか述べておく必要がある。それは彼の著作が、プロティノスの開いた「ゼミナール」で取り上げられていたからである³。そこではプラトン主義者を始め思想家の名が列挙されているが、残念ながら彼らの作品の多くは失われた。ここでアッティコスが注目されるのだ。というのも彼の主張は、断片とはいえ、他のプラトン主義者に比べれば残されているからである。その「註釈書」をプロティノスが読んでいた以上、彼を取り上げることは、当時のプラトン解釈者の議論を再現するという意味でも、プロティノスの主張を確認する意味でも意義があると思われるのだ。

アッティコスのプラトン解釈

1) 『ティマイオス』 解釈の争点

まず解釈者の争点を確認したい。その出発点は「宇宙は生成した」⁴、しかも「宇宙と共に時間は生成した」⁵とする『ティマイオス』にある。この時間は、「一の中に留まる永遠」の「永続する似姿」⁶であった。一般的に、生成したものには崩壊が必然であるが、「生成した」宇宙は、「大いなる私〔神〕の意思」によってそれを免れると宣言される⁷。この宇宙の「生成」を巡ってプラトン解釈者は二つに割れる⁸。一つは字義通りに宇宙と時間が始まりを持ち、従って宇宙の生成は時間の生成と同義とする立場である〔時間生成説〕。この解釈は、宇宙生成以前には時間が存在せず、世界は時間的な始まりを有する、従ってデミウルゴスによる制作が時間の最初に行なわれたことを含意する。もう一つは立体図形が次元の進展によって成立するように、宇宙の生成をいわば時間の外側のこととする立場である〔幾何学生成説〕。これは、世界には時間的な始まりはなく、従ってその意味で成立以前を想定せず、世界は時間の中で制作されないとする立場である。これらの解釈が存在したことは、アリストテレスからも⁹、アルキノオスからも明らかである¹⁰。

ではアッティコスはどうか。プロクロス『「国家」註釈』II. p. 377, 15-378, 6にあるスコリアを見よう。

断片 25

ハルポクラティオン¹¹とアッティコスは、『ティマイオス』では宇宙は時間的に生成した¹²ことがプラトンによって主張されていると理解した。

この断片からはアッティコスが「時間生成説」をとっていたことが分かる。但しこのような主張は既に存在していた。彼の独自性は「この先」にある。以下ではこのタイプの解釈の持つ問題点とまず概観し、その上で彼によるその解決を断片を基に検討していきたい。

2) 素材の先在の意味

宇宙が時間と共に、つまり両者が「同時」に生成したなら¹³、デミウルゴスによる宇宙制作とは、「この世界」と「この世界の時間」の始まりを意味している。ここで「世界制作の前」を単純な仕方では問うことは避けられるべきであろう。一般的に考えて、時間的前後関係を思考に与える枠組みが時間である以上、それが成立していない「制作の前」を時間的な意味で問うことは、形式の錯誤を犯すことになるからだ¹⁴。とはいえこれはプラトン解釈に於いて「この世界の前には何も存在しなかった」と同義ではない。何故なら『ティマイオス』では、この世界は、「同一で同様である」パラダイグマと、制作者としてのデミウルゴスが¹⁵、さらにパラダイグマに由来する映像の「受容者」[もしくは「場」]が¹⁶、この世界の成立の前提として、宇宙生成の「前」に必要なからである¹⁷。従ってこの意味では、「その先」や「その前」を問うことは許されているのである。つまり時間生成説を唱えるアッティコスも、この仕方であれば「その先」を問うことが可能なのである。

断片 23

さてカイロネイアのプルタルコスとアッティコスの周囲の者達は、宇宙における時間からの生成¹⁸を彼らに対して証言するところの〔『ティマイオス』の〕あの言葉をしっかりと守っているが、とりわけ彼らが主張するのは、一方では秩序付けられていない素材が生成に先立って存在しているということ、そして他方ではこの調子外れなもの〔＝素材〕を動かす、悪を為す魂も先に存在している。ということである。

パラダイグマとデミウルゴスの先在をアッティコスは認めているが、ここではそれらに加えて、「素材」および「悪を為す魂」の先在が主張されている。両者の関係を今は措くとして、問うべきなのは「先在」である。既に見たように時間的にそれらが「先在する」ことは、端的には不可能だからである。さらに「秩序付けられていない素材」の本性も検討されなければならない。世界制作とはデミウルゴスによる秩序の付与である以上、その受容者たる素材が秩序を有しておらず、無秩序だと言われるのは当然である。むしろそれ故に、その無秩序が何であり、それを引き起こすものが何であるのかを検討される必要がある。まず「先在」の意味について検討したい。

断片 19

探求がこのようである故に、プルタルコスとアッティコス及びプラトン主義者の多くは、時間的に宇宙の生成を解釈し、以下の探求が発生すると発言している。つまり時間的に宇宙は不生なのか、それとも生成したのか、である。実際〔彼らの主張は〕、宇宙生成に先立って無秩序な動が存在する、だがどのようにしても時間もまた動と同時に存在する。すると世界より以前に時間もまた存在していることになる。だが時間は世界と同時に生じたのだ。時間とは世界の動の数なのだから。「あの時間」は宇宙生成よりも以前に存在する無秩序な動の数であったように。

この断片でアッティコスは、世界生成の「前に」「先在」する「無秩序な動」について述べている。これは同様の運動が述べられる『ティマイオス』30a、および「場」が描かれる 52d-53a の解釈である。この「無秩序な動」が、断片 23 の「秩序付けられていない素材」なのか、或いは動を付与する「悪を為す魂」なのか、その区分はやはり措くとしよう。現在の考察には、これらがデミウルゴスやパラダイグマではないことが確認されれば良いからである。

さてそれらに秩序が付与されて世界が成立する以上、問われるは、この「無秩序な動」が「あの時間」として「宇宙生成以前に先在する」ことの意味である。この「動」が、秩序付けられるべきものとしてのみ「先在」するなら、宇宙成立の条件としてなのであり、時間的な意味ではない。だがしかし「動」である限りで「時間」でもあると言われるなら、そこには時間的な意味が伴う。つまり彼の解釈による世界制作とは、素材である「あの時間」に秩序が付与されるという一面を持ちながらも、秩序なき「あの時間」から秩序ある「この時間」への移行という一面をも有するのである。すると世界の始まりとは時間の移行点であり、「この世界」は、その時点から始まる「この時間」と共に、確かに「時間的に」、或いは「時間の中で」、さらには「[あの] 時間から」生成するのだ。注意すべきは、この解釈が動と時間の同一視に依っており、さらにそれは、動に内在する前後関係を数とし、これを媒介に動を時間と変換する、「時間とは世界の動の数である」という定義に基づく点である。この定義によってこそ、無秩序な動は無秩序な時間と見なされ、それによって時間の二重化が達成される以上、これはアッティコスの時間論を支える重要な仕掛けなのである¹⁹。ではこれを別の断片からも確認してみよう。

断片 31

もし動がなかったなら、調子外れの動も無かった。従って虚しくもアッティコスの周囲の者達は、宇宙の生成以前にも時間は存在していたが、その時間は秩序を得たものではなかったと主張した。

ここからも別の時間が主張されていたことが分かる。「秩序を得たものではない」とされるその時間とは、先の断片 23 で「生成に先立って存在している」「秩序付けられていない素材」、もしくはそれに動を付与する「悪を為す魂」であり、断片 19 で「宇宙生成に先立って存在する無秩序な動」であろう。だとすると彼は、「この時間」が流れる「この世界」の生成より「先に」、世界の

生成条件として「あの時間」が存在していると主張していることになる²⁰。ではこの「秩序付けられていない素材」や「悪を為す魂」はどのような意味で先在しているのか。これについて断片24と26を見てみたい。

断片24

素材そのものについては、アッティコスやプルタルコスの周囲のものが主張しているように原因から不生成なのか、それとも何らかの原因から生成するのか、探求しうるのである。

断片26

〔ボルピュリオスによって言及されているのは〕素材、デミウルゴス、アイデアといった多くの原理が相互に結びつくと考えるアッティコスの周囲の者たちである。彼らはまた不生成で非理性的で悪を為す魂によって運動する素材は、調子外れで無秩序に動かされると主張し、また素材は感性的なものよりも、非理性的なものは理性的なものよりも、無秩序は秩序よりも先に成立しているとした。

断片24で、アッティコスは、素材は原因から生じず、不生成であると主張する。断片26では、悪を為す魂もまた不生成とされ、これは素材とは異なる原理であるにもかかわらず、一方が他方を動かすとされる。これらの説明について二つの点で注意が必要である。第一に、「あの時間」としての素材と、その動の付与者としての「悪を為す魂」がともに不生成だとすれば、始まりがある「この時間」に対し、「あの時間」には始まりがないことになる。すると、世界制作のときまで無限のあいだ「あの時間」は持続していたことになる。これは、永遠に与らない永続が、「あの時間」において成立していた可能性を示唆している。第二に、「あの時間」としての素材は、その動の原因こそ「悪を為す魂」にあれ、それは素材の存在の原因ではない。存在の原因を持たないという点ではかかる魂も同様であるが、これはアッティコスが二元論【もしくは多元論】の立場をとっていることを意味している²¹。

いずれにせよこうした時間の二重化によってアッティコスの『ティマイオス』解釈は成立しているのだが、このとき、二つの時間は二通りの関係によって把握されることになる。つまり「あの時間」は「この時間」成立の条件であることで、一面では因果的前後関係でもあるのだが、他面では、共に時間であることから時間的前後関係でもあるのだ。

3) 動の付与者としての魂

「あの時間」は、「この時間」や「この世界」がそれから出来る限りで、「この時間」、もしくは「この世界」の素材であり、またデミウルゴスが秩序を付与する限りで無秩序である。それが無秩序ながら動いているということは『ティマイオス』解釈に基づいていた。だがアッティコスは、受容者に与えられる無秩序な動の原因を「悪を為す魂」に遡及させている。その意味で、デミウルゴスおよびパラダイグマとともに、この世界の原理でもあることになる。これらの関係を世界制作の「後」を描く断片に基づいて概観したい。これは先在する無秩序としての素材、およびそれを引き起こすものの本性を考察することでもある。そのために冒頭で引用した断片23を再

び取り上げよう。

断片 23

とりわけ彼らが主張するのは、一方では秩序付けられていない素材が生成に先立って存在していること、そして他方ではその調子外れなもの〔= 素材〕を動かす、悪を為す魂も先に存在しているということである。けれども魂より他の一体どこから運動が生じるのか？もしその運動が無秩序であるならば、無秩序な魂に由来するのだ。実にまさしく『法律』の中で、善き魂は正しく思慮あることを教え導く一方で、他方、悪しき魂は無秩序に動き、善き魂によって秩序付けられることを調子外れへと導く、とある。デミウルゴスによる世界制作が後に起ると、一方で素材は宇宙の凝集した構成材へと変化し、他方で悪を為す魂は知性に与って、〔その結果〕思慮ある状態を達成し、秩序を有した運動を行う。というのも形相を分け持つ素材は秩序を達成し、また他方で知性が臨在する魂もそれを達成するからだ。

素材とそれを動かす魂とは、動の被付与者と付与者である。断片 24 で言われたように、確かに素材が存在する原因はないとしても、その動は、善なる秩序とは反対の方向に導く限りで「悪を為す」魂に由来していた。『法律』に解釈上の根拠を有する「悪を為す魂」とは²²、素材の無秩序な動の原因であり、断片 19 で宇宙生成に先立つ「無秩序な動」の源泉であり、その限りで最終的には「あの時間」であろう²³。とはいえ、注意すべきは、この悪しき魂が世界の構成材となる素材と共に、世界制作と同時に「知性に与り」「思慮ある状態を達成し」て「知性が臨在する」とされる点である。これは、かつては「悪を為」していた魂が、「この世界」に未だ残存していることを意味する。つまり「あの時間」を成立させた原因者は「この時間」の構成者として世界の基底に存している。アッティコスはこの両者から現在の秩序ある世界と時間とが成立すると考えるのだ。

まとめ

これまでの考察を整理すると、以下のようになる。

1) アッティコスは『ティマイオス』を字義通りに理解した。断片 19 及び 31 を見る限りでは、世界の成立条件である「素材」〔より根源的にはそれに動を付与する「悪を為す魂」〕を「あの時間」とする、時間の二重化によってこの解釈は達成されている。

2) 「素材」は断片 24 で、「悪を為す魂」も断片 26 で存在の原因はないとされた。それらはデミウルゴスおよびパラダイグマに由来しない「あの時間」であるが、それが始まりを持たずにこの世界に先在していたことは、「永遠」に与らずとも「永続」する時間の存在を含意していることになる。そしてこれらからの世界制作を主張している限りでアッティコスは多元論の立場をとっている。

3) 「無秩序な動を行なう素材」は『ティマイオス』に基づいているが、それに動を付与する「悪を為す魂」は『法律』に基づく。デミウルゴスとパラダイグマとを秩序付与者と秩序と見るならば、「悪を為す魂」と「無秩序な運動を行なう素材」は被付与者となる。断片 19 を見る限り、「あの時間」は、「この世界 [=この時間]」生成後もその背後に控えているといわれるが、これも『法律』に基づいている。

付論

断片 19 から分かるように、アッティコス「時間生成説」は「秩序の有無に関わらず、数を有する限りで時間は動である」という主張を基盤としていた。これを踏まえれば、『永遠と時間について』の以下の箇所でのプロティノスによる論駁は、彼に向けられていると推定することも可能ではないだろうか²⁴。

III-7 (45), 7, 25-26

〔時間を運動と関係付ける人々に対して〕一般に、〔時間とは〕動に付随するものだと主張する人がある。その場合、動というのは、全ての動なのか、それとも秩序付けられた動なのか。

同 9, 2-5

第一に、この場合〔時間が動の数だという主張〕にも、〔前章で検討した〕時間が運動の距離であるという〔ストア派の〕主張のように、全ての動について、つまり何らかの数が全ての動に関わると主張されているのかが検討されねばならない。というのも、無秩序で不規則な運動を人はどうやって数えるのだろうか。どのような数が、どのような尺度が存在するのだろうか。もしくはこの尺度は何に基づいて存在するのか。

¹ 中期プラトン主義者とは「プラトン以降プロティノス以前のプラトン解釈者」を総称するための便宜的呼称である。

² エウセビオスが彼の盛りを 176 年頃と報告していることで二世紀の人物とされるが、全体像は不明。底本は、*Atticus Fragments, Des Places, E., Les Belles Lettres, Paris, 1977* で、同書による番号と行数を表示する。但し同書では直接断片と後代の証言は共に *Fragments Divers* とされるが、以下で扱うのは「証言」である。

³ *Vita Plotini*, 14, 10-14.

⁴ 『ティマイオス』 28b.

⁵ 同 38b.

⁶ 同 37d.

⁷ 同 41b.

⁸ Mullach, G., *Fragmenta Philosophorum Graecorum*, Volumen III, Didot, Paris, 1879, pp. 179-180 を、またプロクロス『ティマイオス注釈』(Proclus Diadochus, *In Platonis Timaeum Commentaria*. I, edited by Diehl, E., Verlag Adolf M. Hakkert, Amsterdam, 1965, pp. 276, 30-277, 32) を、さらに Festugière (*Proclus, Commentaire sur la République*, Festugière, A., Vrin, Paris, 1966-1968.) の当該箇所も参照。

⁹ 『天体論』 279b4-280a1 及び 282a30-b5.

¹⁰ 『ディダスカリコス』 169, 33.

¹¹ アッティコスの子。

¹² κατὰ χρόνον を「時間的」と訳した。これは『ティマイオス』には見られないが、断片 25 以外では 19、26 に認められる表現である。この句は主に二通りに訳されてきた。断片 25 について、Mullach (*op.cit.*, p. 180) は *secundum tempus* と、底本で *Des Places* は *selon temps* と、Baltes (Baltes, M., *Die Weltentstehung des platonischen Timaios nach den antiken Interpreten*, Teil. I, E. J. Brill, Leiden, 1976, p. 46) は、断片 19 の同表現を *der Zeit nach* とする。これに対し Dillon (Dillon, J., *The Middle Platonists*, Cornell UP, London, 1977, Revised, 1996, p. 254) は *in Time* と、Moreschini (Moreschini, C., “Attico”, *Aufstieg und Niedergang der römischen Welt*, Teil. II, Band 36. 1, De Gruyter, Berlin, 1987, pp. 476-491) は断片 26 の同表現を *nel tempo* とする。「時間の中で」は、本稿で論じたように、世界制作に先立つ「時間」と、制作された「時間」の二つを含む、いわば「統一時間」を想定し、「その中で」という意味でなければ不可能であろう。本稿では「幾何学的生成」という、思想上の生成説に反対したアッティコスの立場を踏まえ、これと対照させる限りで「時間的」とした。これはアエティオスに遡るストアイオス『エクロガエ』1.21 (Diels, H., *Doxographi Graeci*, De Gruyter, Berlin, 1958.) p. 330 にある「ピュタゴラスは宇宙を思想上では生成するが、時間的には生成しないと主張する Πυθαγόρας φησὶ γενητὸν κατ’ ἐπίνοιαν τὸν κόσμον, οὐ κατὰ χρόνον」という一文での、「時間的」と「思想上」との対照を念頭に入れたものである。

¹³ 『ティマイオス』37e および 38b.

¹⁴ アウグスティヌス『告白』第 11 巻 12 章及び 13 章を参照。

¹⁵ 『ティマイオス』29a.

¹⁶ 同 52d.

¹⁷ 同 52d.

¹⁸ この断片のみが「時間からの」となっている。

¹⁹ 断片 19 でアッティコスによる動と時間との同一視は、底本の当該箇所 *Festugièrè* が引用するように、時間を動の数とするアリストテレスの時間の定義〔『自然学』219b2-3〕に最終的には基づくものであろう。

²⁰ アッティコスが「あの時間」とした世界生成以前の運動を、プルタルコスが、「時間の素材のごとき無限定な動」とし、これを素材とした秩序付与によって「この時間」が成立するとする〔『プラトン哲学に対する諸問題』第八問題 1007c〕。

²¹ 世界制作の場面では、秩序付与と被付与という二元論的思考をアッティコスは採用しているが、断片 23 および断片 26 では多元論的傾向も示している。このような不分明さは「あの時間」が素材のみを指すのか、魂までなのか、常に判明ではないことに起因しているように思われる。同様の傾向は、『イシスとオシリスについて』369A では二元論を、同 372E では多元論を主張するプルタルコスにも認められる。断片 19 で言及される両者の関係を考慮するなら、アッティコスのこの傾向はプルタルコスに関係するという推定も可能である。

²² 『法律』896e.

²³ 断片 11 も参照。

²⁴ 例えば Harder は (*Plotins Schriften*, Band IVb, Felix Meiner, 1967, pp. 526-529) 擬アルキュタスを、また Armstrong は (*Plotinus III*, Harvard UP, 1967, pp. 320-1) エピクロス派を挙げている。

本稿は、科学研究費助成事業〔基盤研究 C〕課題研究 23520035 「アプレイウス及び中期プラトン主義からみる行為決定における超越的契機の研究」による成果である。